
夏の終わりに来る季節

一二三四

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の終わりに来る季節

【Nコード】

N1032N

【作者名】

一二三四

【あらすじ】

あの世で一番美味しい酒。夏のホラー2010に出しそびれた作品です。字数的に引っ張れる話でもなかったので没に。トホホ。

此岸にある酒の内に美酒と呼べる物はひとつとしてない。教えられるともなく知る事実ではあつたのだが、この度三年ほど前から懇意にしている島津氏から電報を受けて、京は比叡の滋賀との境にある庵へと赴いた。ちょうど世捨て人然とした島津氏は朽ちていると呼んでも些か問題にならぬ住み処より土間を通つて外へ出る最中で私の姿を見るや片手をひよいと挙げてその手に持ったひょうたんを振つた。西日の影が二つ分ほどある距離ではあつたがひょうたんの内に満ちる酒がちゃぶちゃぶと聞こえる。蓮の花のような香が辺りに満ちた。またぞろ氏の調じた得体の知れぬ薬の類であるうとあたりをつけたが氏は首を振るばかりでひょうたんを差し出した。これがその、と問うと首を縦に振り、ならばとひょうたんを受け取る。知れず手から逃げ出しそうな艶やかに磨き上げられたひょうたんである。氏が手を振るついでに左右へ振れていた物だから軽いのである。ろうと思つていたが、なかなかどうしてずしりと重い。なるほどこれが彼岸の酒か。栓もせず開け放たれた口から漂う蓮の香が扇がずとも濃密な。氏の顔見れば呷つて見せよと笑っている。なれば答えようとくびれを掴み一氣とばかりに飲み干せる。喉を抜ける酒。形容しがたき味にやあれど美味にあらず。美酒と思い飲み下したゆえ肩透かしをくらつたようで島津氏を見やるとただ声を上げず笑うばかり。これは彼岸の酒ではなかったのか、と問うと、そうだと答える。美酒ではないのか。そうだ。美酒とはほど遠い味だ。そうだ。埒があかぬとひょうたんを突き返すと島津氏はまあ慌てなさるなどいつもの余裕を以て私の肩を押しとどめた。それはまさしく彼岸の美酒だが此岸には元来存在せぬ物ゆえに味などなくなって当然である、本当の美酒を飲ませるから私の後に付いてきなさい。氏はそういうと庵の裏手に回つて漆や木槽の生い茂る獣道へと進み始めた。幾度も足を運んだ庵にやあるが獣道を通つたのは初めてである。庵

の裏手なぞ気に掛けたことのない私であるから先に行く氏がどこへ辿り着くのか皆目見当が付かぬ。ただ此岸では飲めぬ酒を飲ませようと云う氏の言葉が本当なら彼岸へ連れて行かれているのやも知れぬ。最後に庵を訪れたのはいつだったであらうか。ふと庵の朽ち具合にひとひらの不安が舞う。以前訪れたときあれほど庵は朽ちていたであらうか。少なくとも人が住み人が生きている場所は自然生命の息吹とよぶかは定かではないが朽ちることはないはずである。氏は人並みに掃除をする人ではなかったか。何かおかしい。前に行く島津氏の背が蛇腹の如くくねる道へ見え隠れする。静寂である。西日が差し込まぬ。獣道に生きる音と云えば私の立てる不用意な漆の音だけではないか。ふと振り返るともう庵は見えなくなっていた。いや獣道自体が立ち消えたように見えぬ。草が足下を覆ってかすかに見えていた道などはなくなかったかのように消し去っている。前を向いた。思いがけず近くにあった島津氏の顔に驚いて思わずあつと声を上げて後ずさる。どうかしましたか。やけに丁寧な口調で氏が問う。獣道が。獣道がどうかしましたか。もはや問いではなかった。ここは人の立ち入らぬ場所ゆえ決して離れず付いてきてくたされ。氏は再び蛇腹に見え隠れするほどの速さで歩き出した。もはや振り返るまいと誓う。どのみち道楽の道に生きていたのである。いつ死んでも良かったのではないか。そう思うと身が軽くなった。文字通り歩みが楽になって体を置き去りにしたようである。もう直ぐですよと蛇腹の向こうで氏の声がした。左へ緩く曲がった獣道の先には墓があった。いつの時代の物か分からぬ。ただ全ての墓石に刻まれた文字は風化して読めなくなっている。卒塔婆の文字すら滲んで元が何であつたかも分からぬ。供えられた花は皆茎だけ残して枯れ果て供え物の饅頭は入れ物を残して後がない。ここが彼岸ですか。いいや此岸で最も彼岸に近い場所で、ここなら酒も旨かろう。再び差し出されたひょうたんを受け取ると最初に受け取ったときと同じ重さであつた。ずしりと重い。手から逃げ出しそうである。呷って見せよと氏が急かす。ぐいと一気に呷るとそれはまさしく美酒

だった。蓮である。胃に収まると脳裏に蓮が浮かんだ。味ではないが確かに味で、これはどうしたと氏を見るとそこに島津氏はいなかった。いや地面に崩れ落ちていた。投げ出された手足はだらりと広がって生前の意思なぞ感じさせぬようである。半開きになった目は惚けたように虚ですでに此岸を見ていないことが分かる。作務衣がはだけている。そこではたと氏が作務衣を着ていたことに気付いた。下駄の鼻緒は切れている。冷たくなった氏を前に残りの酒を呷る。美酒だ。蓮が一面に咲く。気付けば腰まで水に浸かっている。周りには蓮が咲いている。いや失禁しているのだ。水はなく古びた墓所に膝について私は失禁しているのであった。我に返ることも忘れたように夢うつつの中で作務衣を剥がす。裸になった氏の体は魂が抜けたように抜け殻と呼ぶにふさわしかった。墓場の置くに桶がある。そこまで氏の体を引きずり桶の中に膝を抱える形で入れる。蓋をする。桶の後ろにおあつらえ向きの穴がある。ここへ桶を。日は暮れている。埋葬するのは明日にでもしよう。服を脱いで作務衣に着替えた。私の一部が剥がされたようである。墓場を出て獣道をゆくとどうしてすぐに庵へと出た。ひょうたんの美酒はない。これから少しずつ溜めるしかあるまい。だが私は飲まない。美酒を飲むにふさわしい人が現れるまでに美酒を溜め桶を作り穴を掘る。

（後書き）

夏のホラー2010とあらずじに正式名称で書いたのは、アクセス数を稼ぎたかったわけじゃないんだからねッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1032n/>

夏の終わりに来る季節

2010年10月8日14時42分発行